

真白い十字架のもと献堂式 1954

はじめに

仙台教会の近所に住む悪ガキの一人だった私（小林）ですが、教会の敷地内で遊んだ記憶はあまりありません。ただ一つだけ、強烈に覚えていることがあります。

教会の周囲は白い柵で囲まれていて、気軽に入ってはいけない場所であるという雰囲気が漂っていました。子どもたちにとっては全くの異空間であり興味をそそられました。近づくことはありませんでした。恐らく親たちが我が子に、「あそこには近づくな」ときつく注意していたのでしょう。得体のしれない外国の宗教への警戒心がまだあったのだらうと思います。それでも怖いもの見たさから一度だけ皆で忍び込み、園庭で騒ぎ回ったことがあります。その時です。突然教会から白人の“巨人”（子どもの目にはそう見えた）が姿を現し、大声で私たちに何かを叫んだのです。びっくり仰天した私たちは、それこそ蜘蛛の子を散らすようにその場から逃げ去りました。それ以降、怖くて近づくことはありませんでしたが、今から思えばあの時の“巨人”こそがグラント宣教師だったのです。

1. 献堂式には仙台市長も出席

1954年（昭和29）11月8日（月）の河北新報朝刊に、「くっきりと十字架 仙台バプテスト教会完成」というタイトルで、次のような記事が掲載されました。

「完成を急いでいた日本バプテスト仙台キリスト教会の新会堂はこのほど仙台市北四番丁電停前に完成、七日喜びの献堂式が行われた。

同教会は二十七年の十一月からグラント宣教師によって始められたが、独立した教会堂がないため長い間 YMCA¹に間借りしたり、仮幼稚園を使ったり、不自由な伝道が行われてきたもので会員たちの喜びはひとしお、真白い十字架が空にそびえた教会堂と集会堂、附属幼稚園があり献堂式はこの日午後二時から約二百人が集まって行われた、同会では新築を記念して七日から十二日まで毎夕六時半から特別伝道講演会を開く」。

真白い十字架が空にそびえ、いかにも洋風で、堂々とした素敵なスタイルの教会を、真正面から写した大きな写真も紙面を飾りました。記事には載っていませんが、

献堂式には岡崎栄松仙台市長²も参列しました。政治的なリップサービスでしょうが、「私はクリスチャンではないが、キリスト教が人類にとっての唯一の希望であり、あらゆる若者にその道を歩んでほしいと願っている」と祝辞を述べたそうです³。

2. 河北新報の記事には特伝の紹介も

新聞記事には「仙台バプテスト教会」や「日本バプテスト仙台キリスト教会」という言葉が使用されていますが、教会組織の手続きが行われるのは数カ月後のことです。正式にはまだ「教会」とは呼べません。しかし、そんなことは世間ではどうでもいいことです。この報道によって仙台市民に「仙台バプテスト教会」の存在が、広くアピールされることになりました。特別伝道集会のお知らせまで記事に含めてくれましたので、その PR 効果はかなり大きかったことでしょう。

この特伝の講師は西南学院大学文学部神学科（当時）の三善敏夫牧師、大阪教会で働いていたアルフレッド・ギレスピー宣教師、音楽担当が旭川伝道所のダブ・ジャクソン宣教師、そして映画担当が連盟事務所の眞鍋長次郎氏でした。映画は空軍パイロットから賀川豊彦との出会いなどを通して宣教師に転身するという、大変特異な体験を持つダブ・ジャクソン宣教師をテーマにした伝道映画だったようです⁴。この頃から教会組織への思いが教会員の高まったと、「仙台バプテスト伝道所沿革」は報告しています。

3. ロティ・ムーン献金と駐留軍チャプレンの協力

さて、この新会堂の建築資金はどのように準備されたのでしょうか。実は南部バプテスト国外宣教委員会からのロティ・ムーン献金（12,000 ドル）が資金の中心として用いられました⁵。そのことを私たちは忘れてはならないでしょう。ロティ・ムーン献金と言え、今の私たちの感覚では、経済的に貧しい国でのキリスト教の宣教活動のために捧げる献金で、アジアやアフリカの発展途上国のことをすぐに思い浮かべますが、戦後の日本は、ロティ・ムーン献金が向けられた正に「経済的に貧しいアジアの国」そのものだったのです。

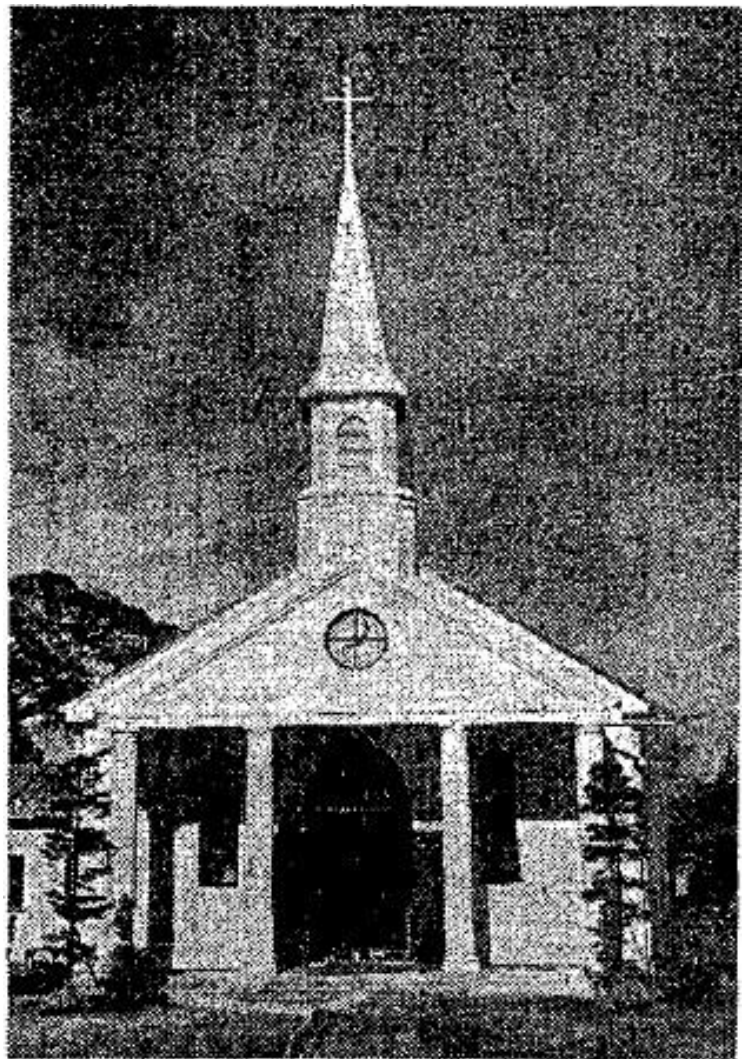
会堂内の調度品を整える資金は、仙台に駐屯していた進駐軍配属の南部バプテストのチャプレン⁶が、軍のチャペル資金から提供してくれました。その額は 1,200 ドルで、これにより講壇の説教台と大椅子、主の晚餐用の台、重厚な長椅子 20 脚をそ

ろえることができました⁷。当時これほどの調度品を備えた教会は、そう多くはなかったはずです。

また、会堂の塔の内部にスピーカーを取り付け、毎日「いつくしみ深き」のチャイムを地域に響かせていました。この機器一式も、アメリカのバプテスト教会の方が購入してくださったものです⁸。何年か後（天野五郎牧師の時代）、機器が故障し修理できない状態になったためなのか、あるいは近隣から騒音のクレームがあったためなのか定かではありませんが、チャイムは流されなくなってしまいました。

「いつくしみ深き」のメロディーはいつの間にか響かなくなりましたが、慈しみ深き主は変わることなく仙台教会の歩みをしっかりと導き続けてくださっています。

（文責：小林孝男）



合会研究大会
 奥、仙台市教委、県小、中、高校
 手遊な金融機関一覽屋である、
 そこで廣屋さんをめぐる最近の

くつきりと十字塔

仙台バプテスト教会完成

完成を急いでいた日本バプテスト仙台キリスト教会の新会堂はこのほど仙台市北四番丁電停前に落成、七日暮の献堂式が行われた

同教会は二十七年の十一月からラント宣教師によって始められたが、独立した教会堂がないため長い間YMCAに借りたり、仮幼稚園を使ったり、不自由な伝道

が行われてきたもので会員たちの喜びはひとしお、真白い十字塔が空にそびえた教会堂と集會堂、付属幼稚園があり献堂式はこの日午後二時から約二百人が集まって行われた、同会では新築を記念して七日から十二日まで毎夕六時半から特別伝道講演会を開く

【写真】完成した仙台バプテスト教会

¹『仕える者として－仙台 YMCA の百年－』（仙台 YMCA、2005）

仙台 YMCA が創立されたのは 1905 年(明治 38)。最初に活動拠点とした場所は東二番丁 30 番地(明治)、そして本荒町 35 の 3(大正)、元柳町 69(昭和)と変遷したが、戦災で施設を消失。戦後の都市復興計画で元柳町 69 の土地は緑地公園敷地に含まれることになり、換地として元柳町 57 番地(現在の立町9-7)の 800 坪の土地が指定され(1946 年)、1948 年からその地で活動を再開。1950 年 6 月には同地に復興会館を開館。グラント師が主日礼拝のために借用したのは、この復興会館の一室だったと思われる(下の写真)

²『主の息吹の中で』 61~62 頁

1946(昭和 21)年 6 月 17 日から 1957 年(昭和 32)12 月 17 日まで仙台市長を務める。1882 年(明治 15)生まれ。宮城師範学校や日本大学で学び、教育行政官の宮城県視学(旧制の地方教育行政官)などを務めた後、当時の東京市に勤務。主に民生部門を担当した。1946 年仙台市初の公選市長となり、空襲で焼け野原となった中心市街地の再興に向け尽力した。1955 年(昭和 30)に 4 選を決めたが、次点者側が開票事務に不正があったとして裁判所に異議を申し立て、仙台高等裁判所は 1957 年に選挙の無効を決定、岡崎市長は失職。晩年は宮城教育大の開学に尽力した。

³ 同上

⁴ 資料(1995/03/26_献堂四十周年記念誌) 5 頁

⁵『主の息吹の中で』 55、58、60 頁

ロティ・ムーン献金が大きな金額であったため、教会として建築に投入した自己資金は非常に少額であったようだ。このことに関してグラント宣教師は、「将来いつか贈られた資金の一部、もしくは全てを返済することができるようになること、そして今回の援助が贈り物であると同時にローンでもあること」を、牧会的配慮をもって教会員へ特に強く伝えた。

ロティ・ムーン献金とは、中国で働いていたアメリカ人宣教師ロティ・ムーンからのアピールの手紙に応え、アメリカのバプテスト教会の女性たちが世界バプテスト祈祷週間を設け、外国伝道や宣教師派遣のためクリスマス前に献金に取り組んだのが始まりである(1888 年から)

⁶ 同上 60 頁 ガレット・ナリー

⁷ 同上 60~61 頁

⁸ 同上 56 頁 サリー・マックラケン



1950 年 6 月立町に開館した仙台 YMCA の復興会館